

中世仏教における呪術性と合理性

平雅行

Magicality and Rationality in Medieval Buddhism
TAIRA Masayuki

- ① 問題の所在
- ② 呪詛と護持僧
- ③ 『東山往来』と拳証主義
- ④ 祈禱の技術史的背景
- ⑤ 中世仏教と呪術体系
おわりに

【論文要旨】

中世社会における呪術の問題を考える際、その議論には二つの方向性がある。第一は中世を呪術からの解放という視点で捉える見方であり、第二は中世社会が呪術を構造的に不可欠としたという考えである。前者の視角は、赤松俊秀・石井進氏らによって提起された。しかし、中世社会では呪詛が実体的暴力として機能しており、天皇や將軍の護持僧は莫大な財と膨大な労力をかけて呪詛防御の祈禱を行っていた。その点からすれば、中世では呪詛への恐怖が薄れたとする両氏の考えは成り立たない。とはいえ、合理的精神が着実に発展している以上、顕密仏教と合理性との関係どう捉えるかが問題の焦点となる。そこで本稿では『東山往来（とうざんおうらい）』という書物を取りあげ、①そこでの合理性や批判精神が内外の文献を博搜した上で答えを見出そうとする拳証主義によって担保されていたこと、②その拳証主義は顕密仏教における論義や文献学研究を母胎として育まれたことを明らかにした。さらに密教

祈禱においても、①僧侶が医療技術を援用しながら治病祈禱を行っていたこと、②一宮で行われた豊作祈願の子祝儀礼も、農業技術の達成を踏まえたものであったことを指摘した。そして、高い合理性を取り込んだ呪術、呪術性を融着させた高度な合理主義が顕密仏教の特質であると論じた。

そして、顕密仏教が中世の呪術体系の頂点に君臨できた要因として、①文献的裏づけの豊かさと質の高さ、②祈禱を行う僧侶の日常的な鍛錬、③呪詛を正当化する高度な理論の3点をあげた。

最後に、合理性と呪術性の共存、呪術的合理性と合理的呪術性との混在は、顕密仏教だけの特質ではなく、程度の差こそあれ、現代社会をも貫く超歴史的なものと捉えるべきだと結論している。

【キーワード】 顕密仏教、東山往来、護持僧、呪詛、拳証主義